

Title	フランス文学と漢文学との出会い ( その九 ) : セガレンの『碑』と中国古典 (1)
Sub Title	Contact avec les lettres chinoises (IX ) : "Stèles" et les textes classiques chinois (1)
Author	森, 英樹(Mori, Hideki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.39 (2004. ) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20040930-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20040930-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

——フランス文学と漢文学との出会い（その九）——

セガレンの『碑』と中国古典 [1]

森 英 樹

序 章

[1] エピグラフの漢字の出所

セガレン (Victor Segalen, 1878–1919) が 1912 年に出版した『碑』 (Stèles: Pekin, Presses du Pei-t'ang. 1914 年に増補) は、独特な詩句と形体によって構成された散文詩である。それは碑石のように縦長なページのそれぞれに、詩のフランス語タイトルが左上に、それと並んで右上に縦書きの漢字句が印刷されている。

この漢字句は“エピグラフ”という言葉がもつ二つの意味を担っている。すなわち碑石に刻まれた銘句であり、かつ文章の冒頭に記された題句・題字である。つまりこれらの漢字句は、詩の内容と主題的に深く関連しているとともに、また金石に彫られて永遠にとどまる碑文字の体裁を持たされている。

本論の末尾にはその漢字句と、本文であるフランス語散文詩のタイトルと、さらにその漢字句の出所とされる典拠の一覧表を付録した。漢字句の出所にはおおよそ 3 種類がある。1) 中国古典 (Classique de la littérature) から引き抜いて引用した断句、2) その他さまざまな漢文出典や故実から独立して、あるいは裁断して引用した熟語 (termes chinois)、3) セガレンが恣意的に作った造語 (mots forgés) などである (末尾の一覧表における典拠は、とりあえず H. ブイエヤ Ch. ドゥメの研究に従っている)。

60 個ほどあるエピグラフ漢字句のうちの約 20 個は、3) の種類、すなわ

ちセガレンが本体の詩に合わせて造作した、正当な漢語法からはいささか逸脱した熟語であり、その残りがさまざまな出典から引用された漢字句である。

そのうち1)の中国古典からの引用句には媒介となる欧訳著作がある。すなわちこれらは、セガレンが直接に漢文原典にあたって引き抜いてきたものではなく、種々の欧語文献ないし仏語対訳書のなかに見出したものである。

その媒介出典はまずヴィゼル (L. Wieger) の『史書撰抄』(Textes historiques)で、これが約15個ほどを占め、ついでクヴルール (S. Couvreur) の『詩経』や『礼記』の訳業でこれが約13個、また『シナ学雑報』(Variétés sinologiques)に掲載された諸論文からのものが約4個ほどある。

## [2] セガレンの漢字学習

セガレンが造句した漢字銘句には、付録の一覧表に注記しているように、正当な漢字の用字法からはいささか逸脱した奇妙な造句や未熟な造語法がみられる。またただのミスプリントとも思えない誤字もある(60や63など)。

ところで『碑』の初版に含まれた48編の詩の原稿が、北京の印刷屋に渡されたのち出版に至ったのは1912年である。したがってこの作品の執筆期間は早くて1910年、実質的には1911年から1912年にかけてであると思われる。その後さらに16編を追加した増補版が出たのは1914年である。

一方セガレンが漢字を学習し始めたのは、年譜によれば1908年頃である。いかにかれが秀逸な才能にめぐまれ、またその学習がいかに精力的かつ集中的であったにせよ、このわずかに4、5年という期間は、漢文文語を修得するにはあまりに短期間である。以上のような誤綴や未熟な造語法が生まれるのは無理もないと思われる。

ふたたび年譜を閲するに、かれは1908年5月から東洋語学校 (Ecole des langues orientales) でアルノルド・ヴィシエール教授のクラスを聴講し始めている。また当時コレージュ・ド・フランスの正教授であったシャヴァンヌの講筵にも列席している。

エドゥアール・シャヴァンヌ (E. E. Chavannes、→ N° 29, p.87.) は、デルヴェ・ド・サン・ドニが逝去したあとのコレージュ・ド・フランスにおける中国・タタール語学文学講座をひき継いだ (1893 年)。その広汎な業績のうちすでに『漢代の石彫』(Sculpture sur Pierre en Chine au temps des deux dynastie Han) などが出版されており、セガレンがその講筵に列した頃は、その大業である司馬遷の『史記』の翻訳 (全体の約三分の一が翻訳され、楚王世家以下と七十列伝は未定) を終えたところであった。そしてセガレンが親しくその警咳に接した 10 年後には卒することになる。

ヴィシエール (Arnold Vissière, 1858–1930) は、総領事として北京に駐在 (1906 年) したのち、東洋語学校の中国語学科教授となった。同僚にアンリ・コルディエ、ガブリエル・ドヴェリアなどがいた。(このコルディエ及びヴィシエールの後を継いだのが P. ドゥミエヴィルである)。

ヴィシエールは 1906 年から 1909 年にかけてのドロース調査団に参加しており、光緒帝の絶句の仏訳などもしている。

セガレンが聴講した頃、ヴィシエールが中国語の講義に用いていた教科書は、たぶん《Rudiments de la langue chinoise, prononciation, écriture, grammaire, syntaxe》ではなかったろうか。こう推測するゆえんはこの『中国語初歩』と銘打つヴィシエールの著書が 1904 年に出たものだからである。

ちなみにヴィシエールはヨーロッパ人中で有数の漢字書家として知られている。セガレン自身その直接の指導を受けたか否かは分からないが、たとえばドゥメの著書にあるその自筆原稿の写真 (Victor segalen, Stèles, 1982, p.213) を見ると、『礼記』の原文を筆写したペン書きのセガレンの書体もなかなか見事なものである。

この東洋語学校での勉強にくわえて、その後の中国滞在の期間中にあらゆる機会をとらえて為されたであろうセガレンの漢字学習は、きわめて精力的かつ集中的であった。それはヴィゼルやクヴールの原文対訳書をいかにかれが隅から隅まで徹底的に精読しているかを見ても証明される。

しかしそれにしても漢文文語の習得は容易な業ではない。“無朝心宣年譚” “死朋生友” “目井” などかれが造作した奇妙な熟語は、やはり失笑を禁じ得

ない。もっとも一方からすれば漢語法に異形の相貌を与えた大胆なネオロジスムとして積極的に評価することもできる。

ドゥメも言うように、あまりに中国的な権威の重みでセガレンを押し潰してはならないであろうし、こうした歪曲や誤用はかれのフランス語の詩と並べるとき、また別の興味をよびおこすのである。

## 第一章 『詩経』 から

### [1] クヴルールクヴルールの詩経仏訳

その碑文漢字が『詩経』に由来する作品について述べる前に、まずセガレンが扱った間接媒介について述べておく。それは《詩経 CHE KING, texte chinois avec une double traduction en français et en latin, par C. Couvreur S. J. Sien Hsien, 1896》で、版行は Sien Hsien (獻縣) のカトリック布教印刷所である。

クヴルールがこの翻訳の底本としたのは、その序文によれば『詩経備旨』であった。1763年刊行のこの書は、朱熹注に鄒聖脉・悟岡の解釈を加えたもので、これが当時もっとも一般に入手しやすい刊本であったらしい。

クヴルールはその他の参考書として『欽定詩経傳説彙纂』、『毛詩註疏』(『十三經註疏』所収)、『皇清經解』などをあげている。

翻訳刊行の動機については、『詩経』が極東古代の人々の心性・風俗・信仰に関するたしかな知識を与えるものであり、西洋の宣教師、歴史家、モラリストなどに有益であるためといった理由をあげている。

該書は見返し裏に「国風圖」と書した古代中国の地図を挿入し、本文はまずページ最上段に原文漢字を縦書きにのせ、つぎに横書きで原文全文のローマ字注音を示す(当時慣行の標音であって、E.F.E.O.=現代フランス注音方式でもピンイン方式でもないことは言うまでもない)。次にフランス語で当該章の大意を示し、そして翻訳主文をのせる。さらにページの最下段に欄をふたつに仕切ってラテン語訳をのせている。

本文の前に 30 ページほどにわたる序説があり、『詩経』の構成や詩法のほか、周代の風俗・政治・産業・教育・芸術・天文学・信仰・格言などを解説している。巻末には「Lettres chinoises」のタイトルで『詩経』に含まれた漢字を部首順に解説している。

## [2] 先行する詩経欧訳

ヨーロッパにおける詩経翻訳は、まずイエズス会士ラシャルム師がラテン語訳を手掛けたのをもちいて嚆矢とするであろう。ラシャルムは 1733 年頃に草稿を完成したようだが、それは刊行されることなく手稿のまま保存されていたのを、ドイツの東洋学者モール（1800–1876）が出版した（Le Père Lacharme 1733. M. Jules Mohl; Confucii Chi-King sive Liber Carminum. Ex latina P. Lacharme interpretatone edidit Julius Mohl. Stuttgartiae et Tubingae. 1830.）。刊行者のモールはテュービンゲン大学教授であったが、パリに定住し、コレージュ・ド・フランスの教授となり、またアジア協会会長となった。

次にプレマール師の断片的な訳がデュ・アルドの『シナ帝国全誌』（1735）のなかに 8 編収められた（Le Père de Prémare; in Du Halde, t. II, p.309–317.）。

次にシボー師が『イエズス会士紀要集』の第 4 巻及び第 8 巻に 10 編の詩を訳した。散文訳である（Le Père Cibot; 《Mémoires ~》 t. IV, p.171–176 に 7 編 1779. 同じく t. VIII, p.198, 199, 240 に 3 編 1782. → N° 21, p.42–56.）。

これに前後して断片的な訳が、R. Morrison, L. M. Langles, Sir W. Jones などにある（H. コルティエの『シナ書誌』による）。

次にレッグ（1815–1897）による業績は、全編英語韻文をもって訳した、しかも浩瀚な序文と注釈を付した本格的な研究書である（J. Legge; The She King; or the Book of Ancient poetry, translated in English verse, with Essays and Notes. London: Trübner & Co., 1876.）。

この後ポティエ（1801–1873）にも仏訳があるが（G. Pautier; Chi-King

ou Livre des Vers, ancien livre canonique des Chinois., Paris, Maisonneuve, 1872.)、しかし上記クヴールの『詩経』訳は、ジェームズ・レグの訳よりも忠実ですぐれたものだとして評価され、後年さらに版をかさねた（以上については→ N° 21, p.42, et N° 32, p.61）。

『詩経』の欧訳および研究は、この後さらにグラネ（Marcel Granet）、ウェイリー（Arthur Waley）、カールグレン（Bernard Karlgren）などに引き継がれていく。

さてセガレンの『碑』において漢字エピグラフを掲げた60余首の散文詩のうち、直接『詩経』に出所する作品は4首ある。以下にその4首についてまず出典原文の漢字部分を訓読したものを示し、つぎにセガレンの詩の邦訳（大意訳）と解説を試み、さらに問題点を論議したい。

### [3] 西方の処女への頌

§漢字エピグラフ§ 無災無害 彌月不遲 是生后稷

§その出典§

「……<sup>かくかく</sup>赫々たる<sup>きょうげん</sup>姜嫄、その徳は<sup>たが</sup>回わず、上帝はこれに<sup>よ</sup>依り、災い無く<sup>そこない</sup>害無く、月を<sup>を</sup>彌へて遅れず、ここに<sup>こうしよく</sup>后稷を生み、これに<sup>くだ</sup>百福を降す……」（詩経、魯頌、閟宮）

§セガレン詩の大意§

道理に合わぬ話ではない。二千年の昔、西欧のあの聖処女はたしかに懐妊したのだ。何故というに、それよりさらに遙かな二千年前、たしかに処女であった“姜嫄”が、我らが民の生みの母となったのだから。天にいます上帝が大地につけた足跡を踏んだがために。

彼女は雌羊が仔を生むように、大した痛みも破傷もなくやすやすとそ

の子羊を生んだ。産み落とされた子羊は一羽の鳥に受け止められ、その翅の片方を揺り籠にし、一方の羽根でやさしく扇<sup>あお</sup>いでもらったということだ。

あり得る話である。哲学者は言っている、すべて尋常ならぬものは尋常ならぬ生まれ方をするものだ。そもそも一角獣は犬や山羊とは異なる生まれ方をするし、龍の誕生も蜥蜴などとはおのずから異なるものだ。尋常ならぬ人間の出生がそこらの凡人の生まれ方とは違うといっても、別に驚くには当たらぬだろう、と。道理に合わぬ話ではない。たしかに西欧のあの処女（マリア）は懐妊したのだ。

### §解説§

エピグラフの大意はこうである。周王朝の生みの母である姜嫄は、その徳が輝かしかつたために、天の神（上帝）の足跡を踏んでその靈氣に感応してたちまち懐妊し、産み月の10カ月を無事に経過し、まさにその産み月の満期に遅れることなく、しかも産門の傷も被らずに皇祖たる后稷を生んだ、と。

人間の理性的・論理的判断からすれば、これはむろん荒唐無稽な神話伝承の話にすぎない。だが中国の昔のある哲学者の言にいう、超常的な存在には超常的な論理が支配すると。

しかも中国歴代の哲学者のなかでもっとも論理的な哲学者、その博学がアリストテレスにも匹敵する宋の朱子もまたこの言に同意するという、この学者のこの論法は正しいと。

なるほど、だとすれば処女マリアが処女のままにキリストを孕み、これを降誕せしめたことは、それをもって直ちに非合理的な、人間の理性をないがしろにした宗教的詐術とするにあたらぬ、そういうことになる……。

V. セガレンはアンチ・キリストである。そしてかれのこの作品は、表面の語調は、こうした中国の某哲学者、あるいはそれに同意する朱子の超論理的哲学に対する揶揄の気味合いで書かれている。だがよく読めばこの揶揄は、正面きっての揶揄ではない。なかばはこれの首肯にも傾こうとする彼自身の



内面の、曖昧な欲求を隠蔽したカムフラージュのようにも思われるふしがある。

### §議論§

『詩経』は「国風」、「小雅」、「大雅」、「頌」の四巻からなっている。その「頌」はさらに周頌、魯頌、商頌の四部からなっているが、エビグラフの出典は魯頌の4編の最後にある“閼宮”から切り取られたものである（“閼宮”は全9章120句からなる長編詩である）。

魯は周の分家である。后稷12世の孫を武王といい、武王の弟を周公旦といい、その子の伯禽が山東省あたりに封じた国を魯という。「魯頌」は実際は伯禽から下って19世の“僖公”を賛美するものである。それが周の皇祖たる姜嫄や后稷への頌辞ではじめているのは、本家周室への義理でもありまた周室から命令でもあったがためと言われる。

そこで本筋の周室の発祥を伝える説話詩は「大雅」の“生民”にあって、セガレンの詩の真の出典は実はこちらの方にある。かれの詩はこの部分のクヴルール訳と訳注に見られる文字（→ pp.347-350）を、ほとんどそのままに刪取してこれを再構成したものにすぎない。

すなわち《西方の処女への頌》の第1句は、クヴルール訳の「TA IA, Livre II. CHENG MING. Chant I」の [ I ] から取っている、

「周の一族を生んだ母は姜嫄であった……彼女は上帝の足の親指の跡を踏んで震えをもよおし懐妊した……その子が后稷であった。」

Marchant sur la trace laissée par le pouce du pied du souverain roi,...

第2句は [2] および [3] から取っている、

「彼女は初産の子を雌羊が仔羊を生むように痛みも傷もなんの損傷もなくやすやすと生んだ、」

...elle enfanta son premier-né aussi facilement qu'une brebis met au jour un agneau, sans rupture, sans...

「赤兎は……氷の中に捨てられたが、一羽の鳥が翼の（片方で）覆い（もう片方で）寝床にした。」

...mais un oiseau le couvrit (de l'une de ses ailes, et de l'autre) lui fit une couche...

（“もう片方で寝床にした”をセガレンは“扇いだ éventait”と言い換えている。）

第3句は同じく348頁下欄の注釈から取っている、

「すべての超常的な存在は、超常的なやりかたで生まれる。一角獣は犬や仔羊とは別様に生まれ、鱈や龍は魚や亀とは生まれ方がちがう。なるほど動物において斯くの如くである。尋常ならぬ人間がそこいらの人間の生まれ方がちがうことが驚くべきことと言えるか。以上の推論は正しい（朱子）」

（«Tout être d'une nature extraordinaire naît d'une façon extraordinaire. La licorne naît autrement que le chien et l'agneau; le crocodile et le dragon ne naissent pas comme le poisson ou la tortue. Doit-on s'étonner que la naissance des hommes extraordinaires diffère de celle des autres hommes ? «Ce raisonnement est juste» (Tchou Hi).

“Ce raisonnement est juste”という朱子の言を引用したクヴルールは、続けて同頁下欄に既に述べた詩経翻訳の先人ラシャルム師の言を引用している、

「...Quorum modus loquendi nobis viam facit ad prædicandam incarnationem Christi」

セガレンの詩の行頭と行末に繰り返される「道理に合わぬ話ではない。たしかに西方の処女は……」が、ここにある朱子の言とラシャルムのラテン語

注釈から刪奪されたものであることは、もはや明白である。

このようにセガレンのこの一編は、中国流の古い作詩法と同様の、先人詩句の裁断や弥縫によって構成されている。エピグラフを主要な典拠である「大雅」から取らずに「魯頌」から刪取したのは、韜晦のためというよりはこちらの漢字 12 文字がより簡明にかれの詩意を要約しているからであろう。

『碑』の他の作品を読むと、セガレンがヴィゼルの《Textes historiques》全 3 巻を精読していたことを至るところで痛感せしめるが、この場合のテキスト刪取についても、かれのクヴルール読書がまことに徹底した精読であったことを十分に明かしているのである。

#### [4] 忠実な裏切り

##### §漢字エピグラフ§ 求友聲

##### §その出典§

「木を伐きること丁丁たり、鳥の鳴くこと嚶嚶たり、幽谷より出で喬木に遷る、嚶としてそれ鳴く、その友を求むる聲なり、かの鳥を相るに猶ほ友を求むる聲あり、矧んや伊れ人なり 友生を求めざらんや、神之之を聴かば 終に和ぎ且つ平かならん。……以下略」(小雅、鹿鳴之什、伐木、第一章)

##### §セガレン詩大意§

君は手紙に書いた：《君の声に応えようと、ぼくはこうして心に秘めて黙している》と。君の心がぼくの弾くりュートの絹糸に応じて調えられているのが、よく分るよ。ぼくは君だけのために弾くのだ。

すべてのものが沈みこむ海の貝、そこに響きわたる音と影とを、どうぞゆっくりと聞いてくれたまえ。いつかそのこまかい音色の陰

翳が聞き分けられない時が来るかも知れない、などとは言わないでくれ。

そんなことを言わないでくれ。そしたらぼくは、君を離れて、君とは違う者のなかに、君のものなる応答を探しに行くつもりだ。四海の果てまでも、こう叫びながら。

君こそわが知己、われを理解する者、弾ぜずにはいられぬ。こうして君ならぬ別人のそばにいてさえも、なお、ぼくは君だけのために弾くのだ。

### §解説§

心底から理解し合っている心の友を“知音”という。それは音楽家とその演奏を完全に理解する聞き手との関係に類似する。この聞き手は、かれが発する言葉（＝音、声）の意味ばかりでなく、その微妙なこころの襞や余韻をも理解するのである。

「すべてのものが沈みこむ海の貝、そこに響く音と影とを、どうぞゆっくりと聞いてくれたまえ。」(Ecoute en abandon et le son et l'ombre du son dans la conque de la mer où tout plonge)

という第2句はそのことを言っている。

たとえ何かの齟齬が二人の間に生じて、たがいに遠く離れることがあったとしても、その別離は「忠実な背信」である。別のあらたな友人とともに語っていようが、“ぼく”が語りかけ（歌いかけ）ているのはやはり“君”であり、求めているのは君のほとんど沈黙に近い、言葉すくない応答である……。解説は以上をもって足りる。

### §議論§

出典である「伐木」は饗宴の詩である。“友生”（同族朋友）の和合を論ずる編章である。その第一章の大意は、森に響く伐木の音も鳥の鳴き交わす声も、

すべてが他との諧和を求めている。まして人間ならなおさら他人との和合、すなわち同族同胞との友誼を求めないことがあるのか、という。

クヴルールも前書きにこの「伐木」全三章を要約してほぼ同じことを記している。

「L'empreur, dans un festin offert aux princes, loue la concorde et l'amitié. Le bruit des haches dans la forêt, dit-il, le chant des oiseaux, tout dans la nature tend à l'harmonie, et invite l'homme à cultiver l'amitié.」(p.180)

ところでセガレン自身が記すメモによると、この作品の契機となったのは友人 H. マンスロンのかれに宛てた手紙と、さらにもうひとつ E. シャヴァンヌの『史記』仏訳(→N° 29. p.87)の序文中にある伯牙と鐘子期の故事であった。この故事は『列子』『荀子』『呂氏春秋』『書言故事』『蒙求』などの諸書にも見えるが、次のようなものである。

「伯牙よく琴を鼓す、鐘子期よく聴く、伯牙琴を鼓するに、志、高山に在れば、鐘子期曰く、善きかな峨々として泰山の若しと、志、流水に在れば、鐘子期曰く、善きかな洋洋として江河の若しと、伯牙の念ふ所は、鐘子期必ず之を得る」(列子、湯問)。

また「鐘子期死して伯牙琴を破り絃を絶ち、終身復琴を鼓せず、以為らく世に知音なしと」(呂氏春秋、本味)ともいう。こうして“知音”“絶絃”などの熟語が生れた。

セガレンがこの“知音”の逸話と詩経の「求友聲」(原文は“求其友聲”)を重ねたその軸は、“声”という言葉(文字)にあっただろう。

“声”とはたんに肉声にあらずしてまた音楽・音律でもあり(五声というように)、誉れでもあり(名声というように)、音信(寄声というように)でもある。「伐木」における“聲”はそうした多義性を含んでいる。

フランス語でも“voix”とは、たとえば“la voix du sang”(=同族意識、

血族本能) という用法にあらわれているように、内心の声でもあり、情感でもあり、意識・思考でもある。

“知音”という漢字熟語をセガレンが知っていたか否かは分からないが、“知音”とはすなわち“その友を求むる声”である。シャヴァンヌの書中で知った伯牙鐘子期の逸話とクヴルールの前書きとは、セガレン自身の交友体験と結びついて、「忠実な裏切り」を着想せしめた。着想は中国の逸話を変形して実現した。

故事における琴の名手伯牙は、かれの理解者鐘子期が死んだ後は絃を絶って生涯二度と琴を弾くことはなかった。しかしセガレンにおける鐘子期は死んだのではなく、“ほく”を理解できなくなったのである。そしてその“ほく”=伯牙は「なお弾ぜずにはいられぬ」と言う。

セガレンが故事にほどこしたこの変更にも、また「忠実な背信 trahison fidèle」という矛盾形容 (oximoron) のタイトルにも、やはり中国的エートスに対するかれ特有の皮肉な揶揄がうかがわれる。

## [5] 懇願

§漢字エピグラフ§ 月出照兮 劳心惨兮

§その出典§

「(1) 月出でて皎たり…… (略) (2) 月出でて皎たり…… (略)

(3) 月出でて照<sup>しょう</sup>たり、佼人<sup>こうじん</sup>燎<sup>りょう</sup>たり、舒<sup>じょ</sup>として天<sup>てん</sup>紹<sup>しょう</sup>たり、劳心<sup>らうしん</sup>惨<sup>さん</sup>たり」(国風卷十二、陳風 8 [月出])

§セガレン詩大意§

どうぞ微笑みともう少し親しげな奉仕をこめて見凝めてくれたまえ、

君は一図にそれを拒むけれども。うら若き乙女よ。

お願いだから何が欲しいか、なにが望みか言いたまえ、お気に入りの

宝石か、赤い花嫁襦袢か、詩か、歌か、それとも人身御供か  
 ……

※

不肖の男、この僕に乞い願う資格は無いけれど、君に求めるのはただ  
 目に見える君の姿、君の仕草や身振りだけなのだ、踊る鳥よ。  
 あるいはおとなしい君の声音、または君の鬢の毛に映える青い光だけ  
 なのだ。でも君の心、賢者の眼には千倍も重い君の魂は、  
 底ふかく秘めたまえ、惑わしの乙女よ、口をつぐんでいておくれ。

§解説§

一見うら若い娘に対する変哲のない恋愛抒情詩である。求愛の男は「お前に不相応な *Cet homme indigne*」というが、それは何故だろう。身分の相違か、異国の男であるためか、あるいは不相応に年齢をかさねた男であるためか？

いずれにしても、この男が固く身を守った娘に求めるものは、自分にもっと親しくしてその愛らしい媚態を見せてくれることである。要するに美少女の外見と反影のみで、それを眺める目の快樂以上のものを欲していない。

男はこの娘をあくまでもたんに視覚的对象 = “*vue, vision*”、あるいは「踊る鳥」としてのみ求めていて、内面的な心の結合は欲していない、というかむしろそれを恐れている。

「賢者の目には千倍も思いその心は奥に秘めて、口をつぐんでいてくれ」というのは、それとのあいだにつねに一定の距離を意図的にたもって、精神的な一体化を保留しておこう、ということである。

もしこの娘をかりに異国の娘、もしくは中国の娘と想定すれば、距離をおいたその恋愛関係、そのもの自体ではなくその“*vision*”とのみ関わろうとする関係は、とりもなおさずセガレンと中国との関係を暗示しているようにも思えるのである。

ちなみに原詩には見られない「踊る鳥」は、セガレンが恣意的に付加したイメージであるが、かれはこの詩に前漢の孝成帝の皇后“飛燕”の故事をかさねているのかも知れない。“飛燕”は体軽腰弱、歌舞に妙であった。『飛燕

外伝』には「飛燕舞風」の故事を述べている。

§議論§

原詩「月出」は難解な詩とされているが、ここに一応その全三章の訓読みを試みてみよう。

(1)

月出でて <sup>しろ</sup>皎きかな  
<sup>うつくし</sup>俊き人は <sup>みめよ</sup>僚きかな  
<sup>のびや</sup>舒かにして <sup>たおや</sup>窈糾かなるかな  
<sup>くるし</sup>心を勞めて <sup>うれ</sup>悄うかな

(2)

月出でて <sup>しろ</sup>皓きかな  
<sup>うつくし</sup>俊き人は <sup>なまめ</sup>嫺かしかな  
<sup>のびや</sup>舒かにして <sup>たおや</sup>憫受かなるかな  
<sup>くるし</sup>心を勞めて <sup>うれ</sup>慄うかな

(3)

月出でて <sup>てれ</sup>照るかな  
<sup>うつくし</sup>俊き人は <sup>あかる</sup>療きかな  
<sup>のびや</sup>舒かにして <sup>たおや</sup>天紹かなるかな  
<sup>くるし</sup>心を勞めて <sup>いた</sup>慘むかな

「僚・嫺・療」はいずれも、女性の顔のみめよきことをいう。「窈糾・憫受・天紹」はいずれも、柔らかなもののしなやかにうねりくねること、まがりくねることの形容である(別様の解釈があり、後述する)。(3)の「慘」はもと「慄」の字であったが『集伝』は「慘」に改めるべしという。

原詩の大意は、月の光のように白々と映える恋人のたおやかな姿を見るに



つけ、恋慕の思いがつのり心が悩み疲れるというのである。

つぎにクヴルールのフランス語訳（ラテン語併訳）を掲げる。

1. La lune à son lever brille d'une clarté pure. Ce beau visage est aimable. Sa vue dilate un coeur serré par la tristesse. L'inquiétude fatigue mon cœur.
2. La lune à son lever brille d'une clarté pure. Ce beau visage est aimable. Sa vue dissipe la tristesse la plus profonde. L'inquiétude agite mon cœur.
3. La lune à son lever éclaire la terre. Ce beau visage est aimable. Sa vue dilate un cœur serré par le chagrin. L'inquiétude accable mon âme.

この仏訳の大意は、清らかに輝く月の光のように美しい人のみめよき顔は憂いにこもる心を晴れ晴れと開いてくれる、わが心はそぞろに落ち着かず悩ましきことだという。

先にあげた原詩訳とこの仏訳とのあいだには相違がある。それは各章の第二句第三句にもっとも顕著である。すなわち“舒”について一般には「ゆったりとして = *lentement, doucement*」の意味にとる、すなわち形容態にとるが、この仏訳は「ひらく、伸べる = *dilater, dissiper*」の意に、すなわち動詞として解釈している。

また“窈窕・懷受・天紹”について原詩和訳は「たおやかに = *sinuosement*」と繚繞の意にとっているのに対して、仏訳は「憂い = *tristesse, chagrin*」の意にとっている。

この二様の解釈の対立は、実はすでに古来の詩経注釈からすでに存在していたものである。クヴルールの仏訳はあきらかに朱子の『集伝』、すなわち新注の伝統を受け継ぐものである。

朱子の新注には儒家流の教訓が含まれている。美人のみめよき顔容はこれを眺めるのは楽しかろうが、心を惑乱させ困憊させるのであるから、君子はよろしく色欲を慎めという道德訓である。

セガレンの《懇願》が、ひとえにこのクヴルール訳に拠ったものであることは明白だ。眺める対象として快樂だが魂を寄せる対象として危険だというクヴルール訳にみられる感覚的なものと精神的なものとの分離は、ある意味で近代的・現代的な視点である。

そうしたことを考えたうえで再読してみると、セガレンの詩はこうした視点への、(同時にそれは儒学者流の教訓的解釈の視点につながるものであるが)、イロニックな揶揄を含んでいることが分かるのである。

「お前には不相応なこの男、私」は、なぜこの娘に不相応なのか。それはこの“私”が異国の者であるからでも低い身分であるからでも老人であるからでもなく、賢者であり君子であるからだ。

最終句の「Cache bien ton âme au fond d'elle, déconcertante, Belle jeune fille, tais-toi.」は、ドゥメも言うように、恋愛の常套句 = cliché をイロニックに扱ったものである。

## [6] 曖昧な妹

§漢字エピグラフ§ 女子有行遠兄弟

§その出典§

「<sup>ていとう</sup>蝮蝮東に在り <sup>あえ</sup>之を敢て指さすなし、女子行くこと有り父母兄弟に遠ざかる。」(国風卷四鄘風、7 蝮蝮)

§セガレン詩大意§

君をなんと呼ぶべきか、どんな愛情を向ければよいのか？それが分からぬままに諦める破目になった妹よ。

君をぼくの恋人と言おうか？ いや、君はそれを許してくれないだろう。ではぼくの親類と言おうか？ そういう<sup>つながり</sup>繋累は二人のあいだにあったはずだ。ぼくの愛人と呼ぼうか？ 君もぼくもまだ

愛し合うほどの齢でもなかった。

※

妹でもあり妹でもなく、どんな血筋とも分からなかった人！——今はさぞ嬉しいでしょう。妹ならず恋人ならず情婦ならず愛人でもなかった、ぼくの愛しい“分からぬ”さん、  
これからは呼び名が決まって、はっきりしたのだ、しきたりと儀式と境遇によって（娘のときの名が失くなったのだから）、  
いまはさぞ嬉しいでしょう。君は人に嫁いだ。そしていま許された喜びにひたっている。君は“妻”。

### §解説§

異母兄妹のあいだに恋愛に似た感情が生じるのは、とりわけ幼少時にはしばしばあることだ。この擬似感情は曖昧な関係（近親相姦の禁忌のうちにあるかも知れぬ）のなかで、つねに不安定に動揺している。

その曖昧さは、名づけられることによって決着する。社会的な呼名を得ることによって、其のものが其のものとなる。名称（= dénommer）が存在を決着（= fixer）する。それによって公認の悦びが許されることになる。共同社会における存在の安定した悦び（= joie）は、慣習や儀礼といった外的なもの（= loi）によって保証されるのである。

これを古代中国の、血縁によって聚居している大家族的社会の現実にあてはめ、そしてそこに支配していた儒教的名目論を思い出してみるとよい。君臣、父子、兄弟、男女などは、“名をつける” = 「名分を正す」ことによって、おのおのそのしかるべき位置に存在が保証されるのである。

この作品「曖昧な妹」を、こうした場と状況のなかに置いて解説すれば、セガレンのこの詩もまたやはり一種の皮肉な揶揄を含んだものとして読みとることができるのである。

### §議論§

エピグラフの「女子有行遠兄弟」の文字は、『国風』のなかの三カ所に現れる。

卷三の14（「邶風」の泉水）、卷四の7（「鄘風」の蝮蝥）、卷五の5（「衛風」の竹竿）である。クヴルール訳ではそれぞれ46ページ、58ページ、71ページにみられる。（H. ブイエが「鄘風」を“livre IX”、竹竿を p.70 と記しているのは誤りである）。

このうちセガレンのこの詩にもっとも関連するのが卷四の〔蝮蝥〕であることは、いくつかの理由から確信できる。“蝮蝥”というのは虹を意味するらしい（毛伝）。古代社会において、虹は陰陽の気の不和するときに生ずるもので、天地の淫気であるという。男女間に不義の交わりがあるときには、あるいは東にあるいは西に、虹が出ると考えられていたのである。

クヴルールも次のように記している。

「Une union qui n'est pas contractée selon les règles, est semblable à l'arc-en-ciel, qui résulte d'un trouble dans la nature, est de mauvais augure et prive la terre de la pluie du matin.」p.58

「泉水」「竹竿」がともに「女子行くこと有り、父母兄弟に遠ざかる」という句を、遠地に嫁いだ娘の望郷の思いを述べるという文脈で用いているのに対して、〔蝮蝥〕の全三章はこの「遠ざかる」を別の文脈で使っている。すなわち慣習や儀礼に違反して嫁いでいく不義の女子を、「父母兄弟に遠ざかる」と誇るのである。

ちなみに「女子有行遠父母兄弟」は当時の流行言葉であつたらしい（→『毛詩後箋』）。ゆえにこの句が国風の数箇所にも常套句（= cliché）として挿入されているのである。（この句を「Femme vertueuse, tu ne pourrais pas être ma soeur.」とする Chou Ling の仏訳は疑わしい。）

すなわち「蝮蝥」のなかでは、クヴルールが「Une fille qui se marie, quitte ses parents et ses frères」と訳す“遠ざかる = quitter”が、たんに“遠く離れていく”の意味だけでなく、むしろ“trahir, violer”の意に使われているのである。

女子は義を犯して行ってはならない、父母の命によって媒酌される婚礼と

いう儀式を経て嫁ぐべきものである。正常な道を離れた交合は虹のように不吉なものである、というのが「蛭蝮」という民謡の歌意である。

虹は陰陽の気の不和によって起こるものであるが、クヴールの解説はこれを「un trouble dans la nature」という。一方、ドゥメが示すセガレンの草稿には「Soeur cadette, amie trouble et tremblante」の文字が見える。

セガレンの想像力をもっとも刺激したのは、おそらく上に掲げたクヴールの「蛭蝮」解説の前書きである。「Soeur équivoque」が書き上げられるにはこれだけで充分であったろう。

かれは「女子有行遠父母兄弟」から“父母”の字を省いて「女子有行遠兄弟」をエピグラフとした。かれの関心は中国における天倫の道德思想ではなく、曖昧な呼称をもつ対象に向かう主体の心理的混乱と不安定の表現にあった。

不和、混乱、動揺は名の曖昧なところに由来する。正しく命名されてはじめて感情も人倫もしかるべき場に到着する。こうした儒教的名目論がかれの意識にあったか否かは知らないが、少なくともセガレンの自我はこうした倫理風土に同一化することはできなかつただろう。

いずれにしても「女子有行遠兄弟」という常套句に対置された「さぞ嬉しうでしょう = Sois satisfaite」というクリッシェは、かれ一流のイロニクな揶揄を利かしたものである。

## [7] 悪しき職人

### §漢字エピグラフ§ 雖則七襄不成報章

#### §その出典§

「<sup>ゆびおね</sup>跂<sup>うつ</sup>きかの織女は、日に七たび襄<sup>うつ</sup>る、則ち七たび襄ると雖も<sup>むく</sup>報<sup>あや</sup>いの章を成さず。院<sup>かがや</sup>くかの牽牛は、もって<sup>くるま</sup>箱<sup>つ</sup>を服<sup>あつまれ</sup>けず……<sup>すなわ</sup>球<sup>すなわ</sup>る天畢あり、載ちこれを行に施すのみ。これ南に箕あり、もって<sup>はら</sup>簸揚うからず。これ北に斗あり、もって<sup>さけ</sup>酒漿<sup>く</sup>を把<sup>く</sup>むべからず……」(小雅、谷風の什、大東)

## §セガレン詩大意§

悪しき職人とは、天の二十八宿の、まず織女星で、織女でありながら一度も絹を織ったためしがない。

雄牛座は、首に綱をかけていながら車を牽くことができない。

網星は、兎に綱をかける形をしていながら、まだ一匹も捕まえたことがない。

箕宿<sup>みぼし</sup>は種子と塵屑をえり分けられないし、北斗星のその杓は油を測る役にもたたない。

と、地上の職人の民は、天上の職人の役立たずと欺瞞とをなじる。

詩人いわく、天なるかれらは光輝を放っている、と。

## §解説§

夜天の二十八宿に輝く星座のうち、織女星（ベガ）は織女の名を持ちながら実際に衣服を織ることはしない。牽牛星（アルタイル）はわれらのために重い車を曳いてくれることはない。畢星（ヒアデス）は立派な網の形をしながら兎一匹とらえられない。箕宿<sup>みぼし</sup>は箕の役をしないし、柄杓の形をした北斗星は油を測る役にも立たない。

と、このように暴政に虐げられる人民たちは、地上の労苦になんの手助けもせず、ただ無益に天上を回転するばかりの星々を難詰する。だが、詩人は言う、いや「星たちは光輝を放っている Ils rayonnent.」と。

「天の星々は四方に光を放つ」と言うセガレンの主旨の存するところは明確でない。中国において日月星辰は皇天の神である。王者を天に配して帝と呼ぶゆえに上天はすなわち上帝であり、五天はすなわち五帝と呼ばれる。五帝は精を降して王者の母に感ぜしめて王者の祖を生む（さきの『西洋の処女への賛』でみたように）。

とすれば「天の星々は四方に光を放つ」という言葉のなかに中国的王道政治思想への皮肉な揶揄を見なければならない（ドゥメはここに詩人の仕事の

無益さの栄光を見ている。そして付言する、詩人は夜天の星と同じく無益さの栄光を放っているかぎり“良い職人”であると)。

### §議論§

出典の原詩は周の支配によって東方へと逐いやられた民（非征服者の殷人たちかもしれない）が、搾取に苦しめられるその窮状を天に訴えるものとされている。

エピグラフの漢字「雖則七襄不成報章」は、そのなかの一句を刪取したものである。そしてセガレンの詩の上5句は、クヴルールの仏訳（p.263-266）からほとんどそのまま選択して奪取したものである。

かれがここで施した変更は、

「la Cuiller ne peut servir à tirer du vin ou de la liqueur」

→「la Cuiller sans usage même pour mesurer l'huile!」

というぐらいの、『碑』に特有の簡潔な (laconique) 文体に置き換えた程度にとどまっている。

かれの創意は結句の一行のみにかかわる。ドゥメによって示される異稿によれば (p.230)、セガレンもこの結句のみに以下の表現の間で躊躇している。

「天文学者はいう、星たちは正確に運行する。かれらは感化する。

詩人はいう、星たちは光輝を放っている。

※

昔の哲学者はいう、星たちは存在しないと。

私はいう、星たちは在ると。……」

天文学者が“星は感化する = influer”と言い、哲学者が“星は存在しない = Ils n'existe pas”と言うのは、天体は現象的存在の背後から人間を風教するという、いわば“天”の思想である。

セガレンはこれを捨てて、“私”や“詩人”が言う“星は在り = Ils sont”、“光輝を放つ = rayonner”というほうを選び、結局“光輝を放っている”のみを決定稿として残した。

これによって『碑』に支配的な揶揄の気味合いがより強く出ることになった。この場合揶揄するところの対象は、天体でもあり天の思想でもあり、さらにまた詩人ということにもなる。

## [8] 奔走する馬車

§漢字エピグラフ§牡馬在垆之野

§その出典§

「駟駟たる牡馬、垆の野にあり、ここに駟たるものを言え、譎あり皇あり、驪あり黄あり。車に以うれば彭彭たり。思うこと彊りなし、馬のここに臧からんことを。駟駟たる牡馬、垆の野に在り、ここに駟たるものを言え、……以下略。」(魯頌、駟)

§セガレン詩大意§

魯の名君は飼ひ駟らした野馬たちを高らかに名乗りあげよ。丸まると肉付き豊かに草場を駆ける、雲雀毛よ、黒鹿毛よ、葦毛よと。かれは意のままにそれらに轡をかけ、2頭立て4頭立ての馬車に仕立てて自在に御していく。

※

私といえは銜をはずした雌馬ども、わが思念に引きずり回されている。その一頭づつが、二頭づつが、四頭づつが絶えずわが馬車を曳きまわす。

あらゆる色合いの美しい雌馬たちだ。深紅のやつ、赤みがかった糟栗毛のやつ、あるいは薄黒毛の赤銅の蹄のやつ。



こいつらには手がつけられない。乗りこなすすべもない。気負い立つ  
その疾駆にまともに前方も見えぬ。

※

わが逆走のなんたる狂おしさ！ ランプもなく手綱もなく闇底のあち  
らこちらへ、ただ憂々たる蹄の火花に鞭打たれて転がるのみ！  
とはいえ馴染みの道筋もある。そこに来ると赤毛は嘶き、瘦せは転げ  
て膝をむく。騎行をためらう岐れ道、どっちを向いても額をぶ  
つける障壁だ。

手中なる指南の磁石をまさぐって、わたしは光の方向をつかもうとす  
る。

※

あっ！ またも駢足、疾走と吹きつける風。目の前の空間が狂おしく  
唸る。車軸が燃え、梶棒が逆立ち、輻が火花を散らす。

私は帝国の辺塞を越えていく、最果ての地にたどりつく、見知らぬ属  
邦の関門へと狂奔する。

がくんと腰への衝撃、ここは替え馬の宿駅。わが馬はギャロップをゆ  
るめ、鱗だつ肌に肌の玉、尖りたつ額、その目には涙と蒼空を  
湛えて。

いまや一角獣が何処とも知れぬところへ私を牽きまわすのだ。くらく  
らと気が遠くなり、見栄も捨ててわたしは泣く。魯の名君、“馬  
公”の太った短馬どもは彼方の有限の地平に降りていけ。

### §解説§

エピグラフの出所でありかつセガレンのこの作品の典拠となっている『魯頌』の詩句は、周代の侯国のひとつである“魯”の国の“僖公”を称えるものである。“僖公”は牧馬にすぐれた名君であったという。

古代のこの頃、諸侯の富は馬の数で答えた。そして牧馬の盛んなことを歌って国の栄えを祝ったという。すなわち「魯頌」のこの一編は、牧馬を比喻として僖公の政治的統治力と知恵を褒めるものである。野生の悍馬を自在にあ

やつる牧馬の術は、また心のなかの荒れ狂う情念を支配する自己統治の徳をも比喩する。

ところが僖公の場合と異なってセガレンの“私”における主体は、みずからの思念を統御できない。ゆえに僖公が飼い馴らす「牡馬」が、こちらでは狂おしく御しがたい「雌馬」に転化される。“私”という馬車は、これらの雌馬たちの狂奔のままに闇の底を引きずり回されるのである。

その苦悩のさまが狂奔の動的絵画として示される。そして最後の段落においては絶望の、自棄自暴の悲鳴に近い叫びが上がる。なぜなら、“私”という馬車を引き回していたのは、中国的な背の低い小太りの馬の類いではなく、実はヨーロッパの一角獣、何人も馴化し得ない怪物なのであったのだから。

僖公の馬たちは「有限の地平」、すなわちあくまでも帝国の内側の広野に降りて行って視界から去る。「わが雌馬」、実は「一角獣」は、中国を越えたさらにはるかな異域へと私を牽きずっていく。

すなわち、セガレンの内面であってエグゾティスムへと駆り立てる狂気じみた衝動は、制御しがたいものであり、従ってこの詩は中国への決別すらもが近い未来に迫っていることを暗示している。

中国への近い決別の暗示は、セガレンがこの一編をもって詩集『碑』の末尾を飾ろうと考えていたらしい（→ Ch.Doumet, p.289）ことから傍証される。

## §議論§

### 1)

まずエビグラフとして掲げられている『詩経』引用の「 牡馬在坰之野」の、「 」および「坰」が誤字であることを指摘しておかねばならない。正しくは「駟駟」および「坰」である。「駟、坰=ケイ」のつくりの「回=ケイ」は「遠い境」の意である。

「 」および「坰」は別義をもつ別字である。ただこれらの字はしばしば混同されるらしく、セガレンが見たらしい『古今秘録』にもあるいはこの混同があったのかも知れない。（ちなみに『三家詩』では「駟」を「駟」に作っ

ているらしい)。

2)

つぎに僖公という歴史上の人物が、最終行の「sage seigneur Mâ, duc de Lou」という“馬公”なるものに転化されていることである。“馬公”は無論セガレンが勝手に捏造した架空の人名であり、すでに「*Ordre au soleil*」にも「Mâ, duc de Lou」としてみえるから、ここでは二度目の登場である。

僖公 (B.C.659–627, 626?) は中国周代に山東省の曲阜に都した封建諸侯のひとりである。僖公→馬公という転化が想像的転化であること自体は容認される。しかしセガレンの如上の詩の文脈から見ると、馬公という名称はいささか侮蔑的な響きを含まないであろうか。

もっとも Ch. ドゥメが言うように、「Mâ」が「moi」との音的類似から選ばれた文字だとすれば、すなわち馬公が「わたし」の分身のひとりであるとすれば、僖公の牡馬と「わたし」の雌馬、“cheval”と“cavale”との対立は、分裂した自我の相剋的対立と解釈されなければならない。

3)

しかもこの“cavale”には明らかに性的意味が付与されている。加えて“cavale”は俗語では“のっぼの女”を意味するとすれば、僖公の短馬——最終節の「*courts et gras*」という表現——と「わたし」の背の高い cavale との対立にも、一種の人種的侮蔑のニュアンスが、意識的にか無意識的にか、潜んでいるのを感じずにはいられない。

4)

最後にこの詩のエピグラフの漢字「駟駒牡馬在垌之野 = よく肥えた馬たちが林の外の郊野にいる」に対するセガレン自身の与えた仏訳、

「*De corpulents étalons tiennent l'orée sauvage des frontières*」

における“*étalons*”“*tiennent*”“*frontières*”などの語彙の選択が、誤りではないにしても、そのコノテーションがセガレンの意図に都合よく引き寄せられていることを指摘しておかねばならない。

“étaions”は「種馬」であり、“frontières”は「国境」であり、“tiennent”は国境の内側に「居ついている」のであって、そうであればこそいまやセガレンの想念は、中国との同一化を拒んでさらに遙かな異域へと疾駆していくのである。マルコ・ポーロを模して擬古文調で書かれ、草稿のまま放置されていた「一角獣を求めて」風（*La Queste à la Licorne*. → in *Oeuvres complètes*, II, p. 1003–1007）は、実現されることのなかったかれのこの意志を証明するものである。（以下続く）

【注記1】 本稿中に略記した文献は以下のものである。

Segalen, Victor, *Oeuvres complètes*, Robert Laffont, coll.

Bouquins. Edition préparée par Henry Bouiller, 1995.

Doumet, Christien, *Victor Segalen. Stèles*, Le livre de poche classique, 1999.

*Cheu King*, texte chinois avec une double traduction par S. Couvreur S. J., 1934.

L. Wieger S. J., *Rudiments. Textes historiques*. 1903–1905.

【注記2】 本論中（→N°29, p.87）などあるのは、『日吉紀要フランス語フランス文学N°29』などの筆者の連続論文をさす。

（以下、次号）